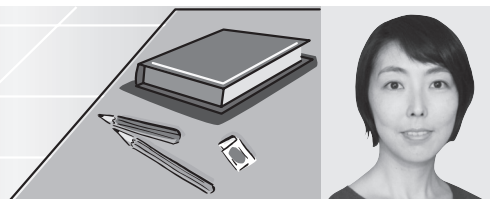


学生時代と図書館 87

—探検と発見と休憩の場所—

花本 知子



学生時代にお世話になった図書館。その利用の仕方を振り返ってみると、実はいろいろな場面で異なる楽しみ方を提供してくれていたことに気がつきました。

公共図書館

本は、複数冊借りるとけっこう重い。ということで、自宅の近所にあった公共図書館には、その重さを気にすることなく（自転車のかごに入れればへっちゃら）、いろいろな棚をぐるぐる巡り、ぱっと目に飛び込んで来た本を片っ端から借りて、家に帰ってふむふむと読む、そんな生活をしていたことを思い出しました。ビジュアル多様でわかりやすい実用マニュアル本から、ゼミに必要な硬めの資料まで、あったかいお茶を入れて飲みながら読む。お茶の時間の最高のお供。思えば図書館とは、棚に“最高のお茶請け”が並ぶ場所でした。

なぜか最寄りの図書館だけ、複数の言語で書かれた本が置かれてありました。イタリア語で書かれた本も揃っていたので、イタリア語の原書を読むのに挑戦し始めた3、4年生のころ、小説を借りて来て読んだり、借りたものの眺めただけで返却したりしていました。

大学図書館

大学図書館でも、棚から棚へ、うろうろ探検しましたが、いかんせん、カラーのカバーを外され、灰色、茶色、白、黒といったくすんだ紙に身をつつまれた本ばかり。「お、なんだこれ？」と目に飛び込んで来た本を手取るというよりは、読みたい本、読むべき本のリストがあり、その資料を探しに、番号をたよりにたずね歩くことが主でした。

おまけに、たくさん借りると、遠い家路までに後悔がやってきます。電車を乗り継ぐたびに、歩くたびに、重い……。しかも、「これはなんだ？

読んでみたいぞ」と思って手に取った本よりも、授業の流れ上、あるいはゼミ発表のために、「来週までに読まなければまずい！」というような資料が多かった。

とはいえ、そのようにあせて読んだ資料は、あせた分、とても集中していたのか、頭のなかにより強く残った気がします。

大学図書館の書庫

通っていた大学が移転し、あたらしいキャンパスの図書館では書庫がだれにでもアクセス可能な地下階に配され、「開架」と「閉架」の間のような存在になってからは、その地下階あたりが探検と休息の場所になりました。日本や外国の雑誌のところでうろうろ。書庫ゾーンの机には、ほとんど人が居ません。本を読んだり、ものを書いたりするのがはかどる。広々した空間に、自分しかないののでほっと一息、よい休憩にもなります。

古い雑誌は、タイトルが目に残ったら、棚から抜き出しぱらぱらめくってみます。その中で、1940年代前半に出版された、『イタリア』という雑誌がありました。「イタリア友の會」編集の雑誌です。そこに載っている広告、たとえば、イタリア語の教科書、辞書、会話読本の広告に、すっかり目を奪われます。

さらに何号かをぱらぱら見ると、当時の在日イタリア大使館で勤務していた人物の名刺が挟まっています。そんな名刺を手にとると、想いが一気に「1940年代前半の東京」に駆けていきます。そんな発見もあったので、論文がPDF化されてオンラインで手に入らなくても、遠方の図書館に行ってコピーついでに探検してみるのが楽しみになっています。

はなもと ともこ（講師・イタリア文学）